

[評価] 5：達成している 4：ほぼ達成している 3：どちらともいえない 2：取り組みを検討中 1：改善が必要

1	教育理念・目標等	評価
1	1-1 教育理念は定められているか	5
2	1-2 教育目標は定められているか	5
3	1-3 学校の特色は何か	5
4	1-4 教育理念・目標に基づく教育が行われているか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

#### <教育理念>

国境を超えて理解し合うためのコミュニケーション力を、日本語を通じて養う。

#### <教育目標>

[日本語科]

[本年度の課題]

四技能をバランスよくのばすことを重視しているが、特に「書く力」をのばしきれないことが多く、「書く力」を効果的、体系的に指導する方策を検討する必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

これまで通り、大学、大学院、専門学校に進学し専門の学習が問題なく進められるように、学習者に「読む・聞く・書く・話す」の四技能をバランスよく身につけさせることを目指している。日本語で自分のことを相手にわかりやすく伝えるために、レベルごとに「書く力」を伸ばすべく教材の見直しを始めている。上級レベルでは、いくつか改善案が示されている。4月に初級からスタートするレベルについてはスピーチ作文の位置づけを再検討するべきだという反省が出ている。

[次年度への課題]

上記の進捗状況を踏まえ、来年度もレベルごとに引き続き「書く力」を効果的、体系的に指導する方策を検討し、四技能がバランスよく指導できるように工夫していく必要がある。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

年度によって学習者の状況は異なるが、教育技術を習得しながら、学習者自身の日本語力を上げていくことが課題である。

[取組の結果と点検・評価]

入学時に日本語力がやや低かった学生のうち、順調に日本語力を伸ばし、教育技術も習得できた学生もいたが、日本語力が伸びず、その結果、教育技術の習得や教材作成に影響が及んだケースもあった。

[次年度への課題]

外国人学生に対しては、引き続き日本語力の向上に力を注ぎ、本科の教育の根幹である日本語教育能

力の習得を妨げないレベルに引き上げることが課題である。また、日本人学生に対しては、「母語としての日本語」から、「外国人に教えるための日本語」を習得できるよう力を注ぐことが課題である。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

当学科に入学する留学生は、日本あるいは母国の日本語学校や日本語教育施設、大学などで初級から中級程度の日本語を習得してきたものがほとんどだが、実務的な通訳や翻訳を行うために必要な語学レベルに達しているものは少ない。このため、まずは通訳・翻訳訓練を用いながら「上級日本語」の習得に一定程度の時間を割く必要があり、より効率的に日本語の上達を図るとともに通訳・翻訳スキルとの有機的な連携を構築することが課題となっている。

[取組の結果と点検・評価]

留学生の母語（あるいは準母語）の違いによって、日本語と中国語間、日本語と英語間の、それぞれの通訳と翻訳科目を設けて訳出の訓練を行うとともに、言語横断的な共通科目を設けて主に日本語のアウトプットに関する訓練を多く取り入れた。またよりリアルで生き生きとした言語表現ができるようになることを目指して、アナウンスや朗読、演劇などの訓練方法を応用して、授業に様々なバリエーションをもたせ、留学生が飽きることなく訓練に取り組めるよう工夫をこらした。

カリキュラムの大幅な改訂から二年目となったこともあり、日本語科目と通訳翻訳科目の有機的な連携も徐々に形になりつつあると考えている。

[次年度への課題]

一年時の留学生には日本語の習熟度的に比較的大きなばらつきが見られたため、特に通訳翻訳科目で、「そもそも『訳す』とはどういう作業か」という基礎的なリテラシーが醸成されていないまま本格的な訳出訓練に入ってしまう、訓練のタスクが重すぎるとされる留学生が散見された。

これは日本語通訳ビジネス科に入学する前までは、日本語学校などでもっぱら「日本語をインプットし、日本語でアウトプット」という学習や訓練のみを続けてきているため、いきなり二つの言語を往来する通訳や翻訳という作業そのものになれていなかったことに起因するのではないかと考えられる。

このため次年度では、特に入学間もない一年時の留学生に対して、より基礎的な技能やリテラシーを育むカリキュラムを導入し、日本語学校での日本語のみを用いた語学訓練から通訳翻訳学校での多言語を用いた語学訓練へのスムーズな移行を促すように配慮したい。またこの点について、全教員の間で共通認識を持って各自の教学に当たることができるよう、より連絡を密にする必要があると考えている。

## <学校の特徴は何か>

学校法人文化学園の設置する専門学校の日本語教育機関として、文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化服装学院への進学を希望する外国人留学生の日本語教育を実施している。また、文部科学省より国費留学生日本語教育委託校に指定されており、行政からも信頼を受けている。外国人留学生の学生会館も整備され、快適な学生生活を送ることができる。

## <教育理念・目標に基づく教育が行われているか>

[日本語科]

[本年度の課題]

上級レベルでこれまで使用していたテキストの改訂版が出版されたため、そのテキストに応じたカリキュラムを整備する必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

上級レベルについては、来年度のテキスト変更に向けて新カリキュラムが6割から7割完成した。初級、中級についてはこれまで通り、本校教員が作成出版しているテキスト『文化初級日本語ⅠⅡテキスト改訂版』『文化中級日本語ⅠⅡ』と自主作成教材を活用し、上級レベルも市販のテキストを用いながら、新聞やテレビ番組などの自主作成教材を多く活用した独自のカリキュラムを実践している。漢字についても本校独自の教材を用いてレベルに合わせた指導をしている。日常生活に必要な日本語力はもちろん、調査や発表、レポート作成といった四技能を統合して活用する教室活動にもここ数年力を入れている。

[次年度への課題]

上級レベルは10月以降に指導が始まるが、それまでに新カリキュラムを整える必要がある。また、使ってみて課題となる部分を明確にし、次年度へ引き継ぐ必要もある。

中級レベルについては、教材と各課のテストの見直しを行いながら、カリキュラムを振り返ることとする。

初級レベルはプロジェクトを組んでアチーブメントテストを改訂することとなっている。テストの改訂を通して、カリキュラムの問題点も振り返る。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

四つの科目群の相互の連関を考え、各科目の学習項目の有機的な結びつきを考えたカリキュラムを整備する必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

本年度、「文法」に関しては、「日本語教育学」「教壇実習」との関連を考え、全面的に学習項目を入れ替えた。また、「日本語演習」に関しては昨年から引き続き、後期中上級技能教材作成に役立つように、学習時期を考え、配列した。

[次年度への課題]

引き続き「日本語を正しく理解し、使える能力を養う」ための「日本語演習」、「日本語に関する専門知識を養う」ための「音声」、「文法」、「日本文化論」などで学習した具体的な事柄が「実践的な教授技術や教材作成能力、コースデザイン能力、評価能力を養う」ための「日本語教育学」に応用できるよう、カリキュラムの調整が必要である。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

学生の全てが専業の通訳者・翻訳者になるわけではないため、より幅広い業種に対応したカリキュラムを現在以上に充実させていく必要がある。また本課程は2016年度に大幅な改訂を行ったばかりであり、教材の整備や科目間の連携、講師間の教育目標の共有などをさらに進めていくことが課題である。

[取組の結果と点検・評価]

日本語通訳ビジネス科に学ぶ留学生のうち、卒業後の進路として最も多く想定されているのは日本語と母語（あるいは準母語）を用いた業務につく、すなわち日本または母国、あるいは第三国での就職である。この点に鑑み、教育理念や目標には、業務の現場で十分に自身のスキルを発揮できるよう、その土台作りをしっかりと行うことが強く意識されている。

特に秋の文化祭を念頭に置いた各科目の授業では、演劇訓練を前年度よりも高い比重でカリキュラムに組み入れ、学校側の協力も得ながら日本語通訳ビジネス科独自の教学内容を模索することができた。演劇訓練は特に「人前で話す職業」である通訳者の訓練の一環として諸外国でも導入の事例が多く見られる典型的な手法のひとつであり、日本語での生き活きとした表現力を身につけるといふ点で本学の教学においても有効であると考えている。

結果として文化祭での公演は成功を収め、内外の評価も概ね好評だった。具体的には大量の日本語のセリフを各自が肉体化し、個人の発信ではなく集団でのインタラクション（相互作用）に落とし込むことで、今後の日本語力や通訳力を高めるための土台を形作ることができたこと、不特定多数の観客の前で自らの肉体と言語のみに頼って表現を行ったことが各自の学習継続へのモチベーションを高め、将来の職業現場における自己表現への自信獲得にも資するものであったことなどが成果として挙げられると思う。

また二年生は初めて同時通訳訓練にも挑戦し、文化学園既存の施設（国際会議室の同時通訳ブース）を利用して講演会形式の訓練を行った。卒業生は必ずしも専門の通訳者や翻訳者になるわけではないが、少なくとも職業現場では、二つ以上の言語を介する存在として通訳や翻訳の作業を任されることは日常的に起こりうることであり、その際に今年度のような同時通訳訓練という高度な訓練を行ったという経験は大きな自負につながるものであると考える。

#### [次年度への課題]

次年度はさらに留学生数が増えることもあり、一年時・二年時ともより積極的に、またさらに規模を大きく設定して新しい課題に取り組むとともに、留学生同士の相互作用や教科間の連携などもより強固にしていくことができるよう、教学内容を十分に考慮したい。

2 学校運営		評価
5	<u>2-1 運営方針は定められているか</u>	4
6	<u>2-2 事業計画は定められているか</u>	5
7	<u>2-3 運営組織や意志決定機能は確立され、効率的なものになっているか</u>	4
8	<u>2-4 人事や賃金での処遇・職場環境の改善に関する制度は整備されているか</u>	3
9	<u>2-5 情報システム化等による業務の効率化が図られているか</u>	4
10	<u>2-6 学校運営を客観的に評価し、維持向上させる機能が整備されているか</u>	3
11	<u>2-7 危機管理体制は整備されているか</u>	4
12	<u>2-8 施設・設備は教育上の必要性及び学生の安全確保に十分対応できるよう 学校教育法に基づき整備されているか</u>	5

#### 《現状・具体的な取り組み／課題》

##### [本年度の課題]

- ・事業計画に対する達成確認が課題となる。
- ・情報システム化において、更にどのような効率化が必要になるかを引き続き検討したい。

- ・学校運営の客観的評価について、今後は第三者も入れた評価について考えていきたい。

[取組の結果と点検・評価]

運営方針に沿って毎年、事業計画が定められており、文化学園事業計画書に掲載されている。学生募集は事業計画通り行き、実際の学生数は目標とした数の96.4%であった。

教員組織については、教務主任が統括し、学校全体の運営は学校長を中心にBIL運営会議を経て決定されている。教務主任が新任であったが、周りの協力のもと、滞りなく運営できた。

処遇・職場環境の改善に関する制度については、文化学園の人事規程により適切に運営されている。情報システム化については、ソフトウェア会社に保守・管理を委託し、効率化も図ってきたが、使用しているソフトが古くなってきて本校OSとの互換性に問題が出始めている。

学校運営の客観的評価については、学園内の監査室にて定期的に実施されている。

危機管理体制については、文化学園施設部を中心とした防災委員会が設置されており、それぞれ防災委員と業務内容もマニュアル化されている。例年通り、4月に防災訓練を実施した。

施設・設備については、耐震工事も実施され、施設・設備は整備されている。例年通り、机、いす、ドアなどの修繕を学生の長期休暇などを活用して実施した。

学校運営の客観的評価については、今年度日本語教育振興協会の日本語教育機関教育活動評価を受審し、高い水準で維持・運営されているものと認められるという評価を得た。その一方で、教員の評価、教員間の連携には課題を指摘された。

[次年度への課題]

- ・事業計画に対する達成確認が課題となる。
- ・情報システム化について、保守・管理を委託しているソフトウェア会社と連携を取りながら、問題点を改善していく必要がある。
- ・第三者（日本語教育振興協会）の評価を踏まえ課題を改善していく必要がある。

3 教職員			評価
1 3	3-1	教育理念・目標が教職員間で共有されているか	4
1 4	3-2	教育の質を向上させるための取り組みが確立されているか	4
1 5	3-3	教職員評価を行っているか	3

《現状・具体的な取り組み／課題》

<教育理念・目標が教職員間で共有されているか>

[本年度の課題]

教職員の研修などを実施し、人材育成に積極的に推進していきたい。

[取組の結果と点検・評価]

年度末に1年の教育活動を振り返り、科ごと（日本語科はレベルごと）に反省報告を作成し、それを基に全体反省報告会を実施し、各教員が学校全体の在り方について共有している。それを踏まえて翌年度の教育方針を作成している。年度初めにはそれらの教育方針を踏まえてレベルごとに専任教員が到達目標とカリキュラムを再検討して修正する。それにしただがって指導法や教材などを教員が分担して作成し、実践する。日本語科と日本語教師養成科は週に一度レベルごとにコース運営についてミーティングを行い、情報共有を徹底している。日本語通訳ビジネス科も適宜ミーティングを行い、情報共有を行っている。今年度もこの方法で教育理念・目標を教員間で共有しながらコース運営すること

ができた。

また、外部の研修に参加した教職員も増加し、教育理念や目標を共有することの重要性がより認識できたと言える。

[次年度への課題]

- ・各科とも、自分たちの教育活動が本当に理念や目標に合致しているか振り返る機会を自分たちでどう作るかが課題である。
- ・日本語通訳ビジネス科では教師ミーティングの機会をさらに増やせるとなおい。

### <教育の質を向上させるための取り組みが確立されているか>

[日本語科]

[本年度の課題]

学生数が増えているにもかかわらず教員の人数が増えていないため、一人一人の教員の仕事量が増えている。そのため、日々の授業をこなすことで精いっぱいになりがちで、自分の授業を振り返ったり、同僚と指導の在り方について議論する余裕がなかなか作れない。

[取組の結果と点検・評価]

学生数が増えたこともあり、昨年度の課題がほとんど改善されずにいる。後期から教員が一人増えたので来年度以降は改善されていくと思われる。

常勤教師は年に一度、「研究活動報告」を行い、日々の教育実践や学外の研究会などで考えたことをまとめ、教師間で共有し、意見を交換する場を作っている。これによって、日々の教育について協働的に研究し、新しい視座を得たり、同僚と価値観を共有したりしている。このような活動をもとに生まれた問題意識を調査研究し『文化外国語専門学校紀要』として毎年1本以上の論文を本校教師が執筆し、インターネット上に公開している。

[次年度への課題]

学生数は横ばいであり、来年度は今年度以上に負担が増えることはないものと思われる。生まれた余裕をいかに教育の質の向上につなげられるかが課題である。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

小規模学科であるので、担当教員が日本語科の授業も持っているため、集中して養成科のことに関わる時間的余裕が取りにくい。

[取組の結果と点検・評価]

今年度も日本語教師養成科の教員は日本語科の授業も一部担当した。そのため、なかなか養成科の問題に専念する時間的な余裕が作れなかった。週1回のミーティングでは、伝達事項だけでなく、カリキュラム、シラバス、授業内容の検討や改善も行った。

日本語科の欄に記載された「研究活動報告」に教師養成科の教員も参加している。また、『文化外国語専門学校紀要』の執筆も同様である。

[次年度への課題]

来年度も今年度同様集中して養成科のことに関わる時間をどう増やしていくかが課題となる。

[日本語通訳ビジネス科]

#### [本年度の課題]

今後数年をかけて学生数の増加が見込まれており、カリキュラムの整備や講師の手配、教学内容の多様化などを遅滞なく行うことが課題である。また特に中国語圏における社会情勢や情報技術の変化の速度が速いため、教材や教学内容をタイムリーに調整して行くことも課題の一つである。

#### [取組の結果と点検・評価]

本年度は昨年度のカリキュラムの大幅な改定から、引き続き科目の改編も少しずつ行った。

学期開始前に、講師間で授業目標の確認と情報を共有した。また、多様なバックグラウンドを持つ学生が増えているため、ダイバーシティを考慮し言語・文化をできる限り等しく扱って指導するよう教師間で話し合いをした。

学生には、よりグローバルなものの見方や考え方を涵養できるように常に配慮を行っている。教材や教学内容を学生のレベルや知的好奇心に合わせ調整し、多くの科目では日本だけではなく変化する世界情勢に関するタイムリーな内容を取り入れるようにしている。

本年度は学内の施設や IT 機材をフル活用することを目指し、講演会形式の同時通訳訓練や中日・英日字幕制作など試みた。将来学生が携わるビジネス現場で求められるスキルやリテラシーを授業に取り入れ、実際の仕事の流れを疑似経験させることで、より高い質の職業訓練を目指している。

また、日本語科の欄に記載された「研究活動報告」に日本語通訳ビジネス科の教員も参加している。

『文化外国語専門学校紀要』の執筆も同様である。

#### [次年度への課題]

変化するビジネス現場で求められる知識や IT スキルなどを学生に身につけさせるため、教師自身の勉強や自己研鑽は常に必要である。しかし、学生数の増加とカリキュラムの改定が同時に進行しているため、教師の仕事量が増え、自分の授業しか見えなくなってしまう恐れがある。

有機的なカリキュラムを目指すために、学期が始まる前に行っていた教師全体ミーティングの回数を増やしていく。自分の授業を振り返りと積極的な意見交換をしつつ、他科目担当の教師と実務経験や知識を共有し、教員みんなで授業のあり方を考えていきたい。

### <教職員評価を行っているか>

#### [本年度の課題]

- ・教員についても項目別の人事評価表を作成し、実施を検討する。

#### [取組の結果と点検・評価]

一般事務職員については、学園規約に則って項目別の人事評価表にて評価を行っている。

教員についても項目別の人事評価表を作成するべく、学園内の大学などから情報提供を得たが、完成には至っていない。

#### [次年度への課題]

一般事務職員に対する人事評価について面談なども取り入れていく必要がある。

引き続き、教員の項目別の人事評価表を作成し、実施を検討する。

4	教育活動	評価
1 6	4-1 カリキュラムは体系的に編成されているか	5
1 7	4-2 授業評価の実施・評価体制はあるか	4
1 8	4-3 目標に向け授業を行うことができる要件・資質を備えた教員を確保しているか	5

19	<u>4-4 成績評価は適切に行われているか</u>	4
20	<u>4-5 各種日本語試験の認定率向上のための指導体制は整っているか</u>	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

<カリキュラムは体系的に編成されているか>

[日本語科]

[本年度の課題]

ここ数年、調査・発表の授業は各レベルが連動し、改善されてきているが、作文の指導についてはモデル作文を模倣するだけの授業形式や、構成を教師が与えてそれに従って書けば書けるというような指導法からどう脱却するか模索している。

[取組の結果と点検・評価]

初級中級については本校作成のテキストを、上級については市販のテキストを軸に、自主作成教材を多く用いてシラバスを作成している。語彙、文法が無理なく積みあがるように配置すると同時に、一貫して四技能をバランスよく指導することを念頭に置き、理解するだけでなく話したり書いたりする力のばせるように、レベルに応じた作文や発表、インタビューなどの活動を積み重ねている。テキストに合わせて漢字の指導も行っており、非漢字圏学習者でも基本的な漢字が読み書きできるように指導している。

また、従来の指導法にとらわれずにさまざまな試みも行い、教材や指導法の改訂を繰り返し、効果的な指導法や新たな指導法を常に実践している。

作文の指導について、上級レベルは改善に向けた方針作りが進んでいる。

[次年度への課題]

作文の指導について、一部のレベルは改善に向けて動き出しているが、体系的にまとめ直すにはまだまだ時間がかかる。来年度も引き続き課題として取り組む必要がある。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

知識、語学力、教育能力の三つの面の相互関連を十分に考えて学習項目がカリキュラムに配置されているかをもう一度見直す必要がある。たとえば、音声や文法で学んだ知識や技能が教育実習で生かされているか、日本語演習で得た四技能の力が教材作成で発揮されるか、というような点を視野に入れてカリキュラムを作成しているか検討すべきである。

[取組の結果と点検・評価]

知識、語学力、教育能力の三つの面の相互関連を考えたカリキュラム編成にするために現状を把握し、改善に取りかかった。具体的には文法では、学習項目の入れ替えと、目標の段階的設定を行った。

[次年度への課題]

インプットされた知識や技術を学生が実際の教育技術や教材作成に応用できるには教師はどのような指導をすべきか考える必要がある。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

通訳・翻訳科目は段階を踏んでスキルを訓練できるようにしている。このようなカリキュラムの取り



組みは 2016 年度から始まったばかりであり、さらなる調整や改善が必要だと考えている。また特に通訳訓練については、通訳が一種の身体表現であることに鑑み、アナウンス訓練・朗読訓練・演劇訓練など「身体を動かす」ことに特化した教学内容を盛り込んでいるが、まだ十全には展開できていない。これらの充実も今後の課題である。

#### [取組の結果と点検・評価]

カリキュラムの大幅な改訂から二年目を迎え、日本語科目・通訳翻訳科目・ビジネス科目・外国語科目相互の連携は一年目よりも深まったと考えている。また語学を単に道具としてのスキルに矮小化して捉えるのではなく、全人格的なスキルとして捉えることも念頭に置いて、常識や一般教養などを涵養することもカリキュラム構成の背後にある（しかし重要な）柱として位置づけた。

具体的にはまず日本語科目と通訳翻訳科目で一部の教材の連携を図り、留学生がより体系的にスキルを習得できるよう試みた。また必修選択科目ではよりバラエティ豊かな教養系の科目を新設し、留学生が現代の職場環境におけるリテラシーを多面的に学べるようにし、なおかつそれらが教学の支柱である日本語科目や通訳翻訳科目へ有機的にフィードバックされるよう教師間で意見交換と協議を重ねた。

#### [次年度への課題]

上記のような取り組みをさらに深め、日本語通訳ビジネス科としては初の四クラス（一年次二クラス＋二年次二クラス）体制に対応していく。またカリキュラムは更なる改訂を行い、日本語科目・通訳翻訳科目・ビジネス科目・外国語科目間の連携をより意識し、座学だけではなく実習の機会を引き続き積極的に取り入れつつ、最終的な目標である就職や進学につなげていくようより細かい配慮を行う。就職を念頭に置いた上級日本語の訓練、観光やアテンドなど比較的タスクの軽い分野から始める校外実習、同時通訳や字幕翻訳など専門的なスキルを必要とする比較的タスクの思い通訳翻訳訓練を引き続き展開する。また各教科の中で取り上げる教材に現代社会の様々な側面を盛り込んだ素材を選ぶなどして、より実務的な語学能力を育むことができるよう、教師間の意見交換を含めて積極的に改訂を行っていきたい。

### <授業評価の実施・評価体制はあるか>

#### [日本語科]

#### [本年度の課題]

今後、現状に加えてさらに公的な教員評価体系が必要かどうか検討する必要がある。

#### [取組の結果と点検・評価]

授業に関して、教師に対する公的な評価体系はないが、今年も数回教師から学習者にコース評価を実施し、どのような授業が効果的だったか調査した。また、事務からも学習者に対して授業に対する評価アンケートを実施し、それらの結果をもとに、教育の問題点を把握すると同時に改善のための方策を検討した。

また、教師間で要望があれば、お互いに授業を見学し合い、授業に関する意見交換をすることを奨励している。今年度も新任教員や休職明けの教員、本校での経験の少ない非常勤講師が授業見学を行い、授業改善に取り組んだ。

公的な教員評価体系については情報収集にとどまっている。

#### [次年度への課題]

引き続き、学園内の大学などと連携して、教員評価の体系化に向けて情報収集を進める。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

今後、現状に加えてさらに公的な教員評価体系が必要かどうか検討する必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

授業に関して、教師に対する公的な評価体系はないが、今年も数回教師から学習者にコース評価を実施し、どのような授業が効果的だったか調査した。また、事務からも学習者に対して授業に対する評価アンケートを実施し、それらの結果をもとに、教育の問題点を把握すると同時に改善のための方策を検討した。

公的な教員評価体系については情報収集にとどまっている。

[次年度への課題]

引き続き、学園内の大学などと連携して、教員評価の体系化に向けて情報収集を進める。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

学生の声だけでなく、教師間の意見交換などを通して授業の質の向上を図るために、教師間の授業見学や相互評価を行える機会を作る。

[取組の結果と点検・評価]

事務が学習者に年に一度行っている授業内容に関するアンケートの他に、年度末に履修科目に対する満足度や要望についてアンケートを実施した。それらの結果をもとに、教育の問題点や改善を教師間で検討するようにしている。

また、教師間ではお互いの授業を見学し、意見交換をしている。また、新しく加わった教師に関しては授業見学を行っているが、短時間（例えば1時間）だけだと授業の目標や取り組みの内容が把握しきれないため、3時間にわたる授業全体をカメラで撮影し授業の流れや学生とのやり取りなどを含め、一緒に検討するようにする。

[次年度への課題]

来年度は学生の増加で新しい講師も加わるため、科目責任者の授業の見学や担当教師間の積極的な話し合いが必要となる。また、学内の「研究活動報告」に日々の教育実践をまとめることで、授業を振り返り、他コースの教員と課題を共有する。

## <目標に向け授業を行うことができる要件・資質を備えた教員を確保しているか>

[本年度の課題]

学生数の増加に伴い、要件・資質を備えた教員を確保するための方策を講じる必要がある。また、あわせて教員の資質能力の向上等についても考えていきたい。

[取組の結果と点検・評価]

今年度実施した非常勤の募集は早い時期に応募を行ったことが功を奏し、多くの応募者から要件・資質を備えた教員を確保することができた。

また、日本語科・日本語通訳ビジネス科ともに新任の教員に対して、スムーズに適応してもらえるような工夫が積み上げられてきている。

[次年度への課題]

引き続き、適切なタイミングでの教員募集ができるように配慮する。

### <成績評価は適切に行われているか>

[日本語科]

[本年度の課題]

成績評価がほぼアチーブメントテストの結果のみでなされている現状に、いかに学習者の平常の取り組みを組み込んでいくかが大きい課題である。

[取組の結果と点検・評価]

今年度も、学習者の理解度、到達度を確認するためにどのレベルでも各課で理解度を測る「各課テスト」を実施した。また、使用している教科書ごとに「初級前期」「初級後期」「中級前期」「中級後期」「上級Ⅰ」「上級Ⅱ」というレベルが設定されているが、そのレベルの学習が終わった時点で「文法・聴解・読解・作文・会話・漢字」についてアチーブメントテストを行い、その結果をもとに「ABC」の3段階評価を行った。アチーブメントテストの合計点が6割未満の学習者は再度そのレベルの学習を行い、弱点を克服してから次のレベルに移動できるようにした。

今年度も平常点を適切に成績評価に組み込むための新しい方策は見いだせなかった。

[次年度への課題]

成績評価がほぼアチーブメントテストの結果のみでなされている現状に、いかに学習者の平常の取り組みを組み込んでいくかが引き続き課題である。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

指導内容と評価方法、評価内容、評価基準があっているかどうか常に確認し、必要に応じて改訂していく必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

今年度も、「日本文化論」については理解度を測る筆記テストを各科目で実施した。「日本語演習」では4技能の試験（読解、聴解、発話、文章表現）を年間2回実施した。「日本語学 文法」に関しては、年4回の筆記テスト、音声は年2回の実技と筆記テストを実施。以上はそれぞれ点数により成績評価を行った。また、「日本語教育学」については年2回の筆記テストを実施し点数で成績評価を出した。これらの筆記テストはその都度テストを見直し、一部を改訂した。また、「日本語学 文法」に関しては、学習項目の入れ替えに伴い、すべてのテストを改訂した。「教科書分析」「テスト作成」「教材作成」「教育実習1, 2」については独自に設定した成績評価のポイントに従い、「ABC」の3段階評価を行った。課題提出と教壇実習については、今年度評価法を再検討し、改訂した。今年度も筆記、実技テストについては基準の点数（60%）に満たなかった場合に再試験により習熟を図った。

[次年度への課題]

引き続き指導内容と評価方法、評価内容、評価基準があっているかどうか常に確認し、必要に応じて改訂していく必要がある。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

現在、テスト以外の発表・課題などの遂行評価は教師によって基準が様々である。各教師の考えを尊

重しながらも学生達が理解しやすく不公平感などを感じない客観的な評価基準をきちんと提示していく必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

必修・必修選択科目授業においては、理解度を測る筆記試験や、発表・日々の課題の遂行などの達成度を測ることで成績を評価している。その結果に基づき「SABCD」の5段階評価を行っている。

特別授業や自由選択科目の場合、科目への参加度・課題遂行などにより「PASS/FAIL」で評価している。

科目によって評価は様々であるが、学期始まりに配布する授業案内や教科オリエンテーションで詳細を説明し、評価基準を提示することになっている。

[次年度への課題]

授業の内容と評価方法、評価基準が合っているかどうかを常に確認し、学生にも分かりやすいように提示していく必要がある。

<各種日本語試験の認定率向上のための指導体制は整っているか>

[日本語科]

[本年度の課題]

現状の日本語能力試験対策が効果的か学習者に調査する必要がある。また、日本語能力試験以外の試験対策はまったく行っておらず、今後学習者のニーズに応じて指導の在り方を検討していく必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

日本語科で1年以上学習した学生には「日本語能力試験N2」以上に合格できることをめざし、例年と同様に日本語能力試験対策を行った。市販の問題集と自主作成教材を用いてN1、N2、N3レベルの対策授業を実施した。また、日本語通訳ビジネス科の選択授業として実施されている対策授業を日本語科の学習者も選択できるように工夫し、学習者のレベルアップを目指した。

学生へ行ったアンケート調査では日本語能力試験対策はおおむね好評だった。

[次年度への課題]

日本語能力試験対策に加えて他の資格試験対策へのニーズを分析する必要がある。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

各科目の学習が進んでからでないと、「対策」授業の効果が十分に上がらないが、試験の日程と各科目の進度にあわせた「対策授業」の日程を調整することが課題である。

[取組の結果と点検・評価]

日本語教師養成科では今年度も全国日本語教師養成協議会の実施する「全養協日本語教師検定」の受験を学習者に課している。この試験は「現場で日本語を的確に教えるために必要とされる実践的な知識・能力」を測定するものであり、現在の日本語教師養成科の教育内容と比較的関連性の高い検定だと考えている。そのため、日々の授業がこの試験の「対策」として有効である。さらに、試験対策としては問題集を使った演習を試験の三ヶ月ほど前から実施した。

[次年度への課題]

各科目の学習が進んでからでないと、「対策」授業の効果が十分に上がらないため、試験の日程と各

科目の進度にあわせた「対策授業」の日程を調整することは引き続きの課題である。また、「文法」の授業でも試験対策として有効な問題演習を行った。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

会社から求められる資格と学生のニーズは必ず合致するというものではないので、就職活動の現状や社会の動きを反映させながら、対策科目を流動的に運営する必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

日本の会社で最も認知度が高い「日本語能力試験」「BJT ビジネス日本語能力テスト」は必修科目と自由選択科目に設けており、就職活動に役立てるようにしている。

その他、「SPI」、「日本語語彙力検定」、「TOEIC」なども自由選択科目に設け、社会のニーズや学生のニーズに合わせ履修できるようにしている。

[次年度への課題]

留学生の採用において日本語力の判断基準となっている「日本語能力試験」は学生のニーズも高い科目である。7月や12月にN1に合格できなかった学生が再度履修したいという要望があったため、半期限りの履修という条件をなくし、来年度からは通年で履修できるようにする。

5	学生支援	評価
2 1	5-1 進学・就職指導に関する体制は整備され、有効に機能しているか	5
2 2	5-2 学生相談に関する体制は整備され、有効に機能しているか	5
2 3	5-3 学生の心身の健康管理・事故・怪我サポートを担う体制があり有効に機能しているか	5
2 4	5-4 学生寮等、学生の生活環境への支援は行われているか	5
2 5	5-5 保護者と適切に連携しているか	4
2 6	5-6 卒業生への支援体制はあるか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

<進学・就職指導に関する体制は整備され、有効に機能しているか>

●進学

[本年度の課題]

文化学園大学、文化服装学院、文化ファッション大学院大学など内部進学希望者、他専門学校、大学、大学院への進学希望者それぞれに対し適切な指導、アドバイスを行い、希望通りの進学先に進めるようサポートする。

[取組の結果と点検・評価]

日本語科は在籍者の7割近くが日本の高等教育機関に進学している。進学指導は年3回行われる進路調査で学生の希望を把握し、クラス担任と進路委員と連携して行っている。具体的には学校説明会の開催日時、推薦情報などの提供や、願書の書き方、面接指導などクラス担任を中心に指導している。各クラス担任が学生の進路を把握し、個別に対応しているので、学生のニーズに合った指導ができていると思われる。

[次年度への課題]

学園内部進学者だけでなく、他大学や大学院への進学を希望する学生のニーズに応えるため、入試情

報などを広く収集し、より適切な進学指導ができるようにしていきたい。

## ●就職指導

### [本年度の課題]

- ・就職を希望する留学生が多数いるが、日本での就職活動や会社での具体的な業務内容に関しては十分な理解ができていないケースが多い。日本で就職した OB・OG から就職体験談やアドバイス、職場での事例などを直接聞ける機会を設け、在校生の就職活動に活かしてもらいたい。
- ・留学生に関しては企業が求める人材像や能力、期待など様々であるため、常に就職に関する情報を更新していく必要がある。

### [取組の結果と点検・評価]

実際に日本での就職を希望する学生に対して、授業以外に個別で就職指導および支援を実施している。主に放課後を使って、エントリーシートの添削や面接練習などを行っている。また就職先や進路、活動中の悩みなどについても相談も受け、精神的にもサポートしていけるよう努めている。

キャリア・コンサルティング有資格者のビジネス科目担当教員と職員で構成された就職委員会が就職希望の学生のサポートをし、卒業後も情報提供や相談など就活支援を持続的にやっている。

また、1年次には希望者に限り、1週間の日本企業体験を行い、実際の日本企業で働き、業務を経験しながら授業で学んだことを実践する場を提供している。

日本で就職した OB・OG が来校したとき、授業の中でゲストスピーカーとして参加して職場での事例などを直接聞ける機会を設け、在校生の就職活動に役立つようにした。

### [次年度への課題]

留学生において、日本の就職活動は特殊で、スケジュールにそって動かないと、日本で就職することが難しい。日本での就職希望の学生へどのように就職に関する情報を提供するか、また就職活動でぶつかる様々な困難をどのようにサポートすればいいのかということは常に課題である。

また、連携が始まったばかりである学園の就職支援室とどのような連携を図っていくのかを模索する必要がある。

## <項目「5-2～5-6」>

### [本年度の課題]

- ・クラスメイトや先生とのコミュニケーションに問題を抱える学生が目立っている。その対応について、学生相談室との連携による様々な事例・症例への認識を深めるための検討を要する。
- ・学生寮での生活ルールについて、不適合が生じる学生への指導を寮長と引き続き連携していく。
- ・学内設備について、学生アンケートを参考に更なる充実を図っていく。

### [取組の結果と点検・評価]

- ・学生相談に関する体制について、心療内科クリニックを紹介する等、医務室との連携を図ることができた。また、専門クリニックに紹介した後も学生の様子を見ながら、その後の相談に対応していった。
- ・寮長から提出される報告によって学生の状況を把握し、勉学への支障が出る恐れのある事項や日本での生活ルールの理解について、必要に応じて学生と面接を実施した。
- ・各階に設置された給水機だけでなく、お湯が欲しいという学生からの要望に対し、ロビー階の就職相談室内にお湯が使用できるウォーターサーバーを設置した。

### [次年度への課題]

- ・学生の言語ストレスを少しでも軽減できる学生相談体制の検討。
- ・学生生活調査（アンケート）による現状把握と教職員からのヒアリング等による支援の在り方を検討する。
- ・特徴を持った学生への対応に関する教職員の自己研鑽

6 在留管理と生活指導		評価
27	6-1 入国・在留関係の管理・指導と支援が適切に行われているか	5
28	6-2 日本社会を理解するための支援が適切に行われているか	4
29	6-3 我が国の法令を遵守させる指導を行っているか	5
30	6-4 常に最新の学生情報を把握しているか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

[本年度の課題]

- ・近年の留学生を取り巻く状況を踏まえ、入学時オリエンテーションにおける安全な留学生活のために守るべき法律・マナーに関する説明の更なる強化を検討する。
- ・特定活動で日本に在留する日本語通訳ビジネス科卒業生について、引き続き管理・指導に努める。

[取組の結果と点検・評価]

- ・入学時オリエンテーションで使用する冊子を平成 29 年 4 月期まで使用していた「安全な留学生活」から「外国人 在留マニュアル」（東京都青少年・治安対策本部発行）に変更し、在留管理をはじめとした守るべき法律や生活マナーについてのオリエンテーション説明を徹底した。
- ・平成 29 年度は 4 名の卒業生が特定活動で在留した。月 1 回の状況報告を原則とし、来校できない者については、電子メールでのやり取りを行った。

[次年度への課題]

- ・入学前の日本社会を理解するための支援について、入学時オリエンテーション内容の予習編を各海外事務所で実施し、より深く理解するための体制を整える。
- ・卒業後に特定活動で在留する者の状況把握と就職支援の強化

7 学生の募集と受け入れ		評価
31	7-1 学生の受入方針は定められているか	5
32	7-2 学生募集活動は、適正に行われているか	5
33	7-3 学生募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか	4
34	7-4 入学選考は、適正かつ公平な基準に基づき行われているか	5
35	7-5 適正な定員設定及び在籍者数になっているか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

[本年度の課題]

- ・募集活動における学校案内書について、学校の特色がより見易く、記載事項が分かり易いものへと改訂を行う。
- ・海外における留学紹介機関においては、適正かつ効果的に行われているかを引き続き確認していく。
- ・インドネシア（ジャカルタ）での窓口を開設して 2 年目となる平成 29 年度は、その活動をさらに軌

道に乗せて行けるように努める。

- ・平成29年度から始めるタイの語学学校と提携しながら、学生募集を更に充実させる。
- ・日本語教師養成科及び日本語通訳ビジネス科について、卒業生や在校生の母校である日本語学校訪問の実施を充実させていく。

#### [取組の結果と点検・評価]

- ・学校案内書について、2018年度募集用から制作会社を変更して、より見易くするとともに入学希望者へ伝えたいことを明確化した。
- ・文化学園海外事務所以外の学生募集連携会社において、定期的に連絡を取りながら情報交換に努め、当校からの問い合わせについては各会社、迅速に対応してもらうことができ、良い連携関係を築けている。
- ・インドネシア（ジャカルタ）の学生募集窓口は開設して2年が経った。9月に現地（スラバヤ、ジャカルタ）での留学フェア参加、1月留学フェアへの資料参加の他、現地窓口でのSNSを通じたPR、現地発行の留学の手引きへの学校情報の掲載を実施した。2017年10月期入学者4人、2018年4月期入学者0人であった。
- ・タイの語学学校との連携について、2月の留学フェアでタイに出向いた際に入学志願者の獲得に関する有益な情報交換を行った。この語学学校に限らず、タイ学生が日本の留学先を決定する際の流れについても知ることができた。
- ・日本語教師養成科及び日本語通訳ビジネス科の学生募集について、日本語学校訪問は訪問時期を広げて強化した。個々の学生を大切にすることにより、進路指導の先生との信頼関係を築くことができ、進学先として選択していただけるということがいくつかの事例からも示された。また、日本語教師養成科の文化庁認定420時間講座の認定を受けて、日本語教師になることに興味を持つ大学生（国籍問わず）をターゲットにした大学訪問も少しずつではあるが実施した。

#### [次年度への課題]

- ・2018年度はホームページのリニューアルを実施。完成に向けた計画的な遂行にあたる。
- ・法務省 日本語教育機関の告示基準第1条第1項31号（入学希望者に提供している情報）について、海外受付窓口で理解と協力を得ながら、適正な受け入れに向けて更に検討していく。
- ・インドネシア（ジャカルタ）学生募集窓口及びタイの語学学校との連携について、現地の状況を随時、把握しながら入学志願者の獲得に繋げていく。
- ・日本語教師養成科と日本語通訳ビジネス科の海外からの直接入学者を増加させるため、海外事務所を持たない地区での入試を計画する。2018年度は、香港での実施を計画。
- ・日本語教師養成科及び日本語通訳ビジネス科の学生募集について、日本語学校訪問や大学訪問を更に強化して継続する。
- ・東京よりも西の地域からの問い合わせが数件寄せられる状況を鑑みて、日本国内で開催される進学相談会について、都内での開催だけではなく関西地区で実施される相談会への参加を検討する。

8	財務	評価
36	8-1 中長期的に学校の財務基盤は安定しているといえるか	5
37	8-2 予算・収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか	5
38	8-3 財務について会計監査が適正に行われているか	5
39	8-4 財務情報公開の体制整備はできているか	5



《現状・具体的な取り組み／課題》

[本年度の課題]

文化学園の財務基盤については18歳人口減少による学生減と、支出に占める人件費率増加に対する対策が必要である。

[取組の結果と点検・評価]

平成29年度は人件費率1%減、4000万円減を達成した。学生納付金は1000万円収入増となった。

[次年度への課題]

今後も人件費等の見直しを進め、さらに人件費率減と、学生納付金増を目標とする。

9	法令等の遵守	評価
40	9-1 法令、設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	5
41	9-2 個人情報に関し、その保護のための対策がとられているか	5
42	9-3 関係省庁への定期報告を遅延なく実施しているか	5
43	9-4 自己点検・自己評価の実施と問題点の改善に努めているか	3
44	9-5 自己点検・自己評価結果を公開しているか	3

《現状・具体的な取り組み／課題》

<項目「9-1～9-3」>

[本年度の課題]

個人情報保護については、昨今の巧妙なウイルス対策など、より一層情報漏えいに注意していかなければならない。

[取組の結果と点検・評価]

今年度は情報漏えいなどの事象はなく、入国管理局や渋谷区などへの報告も遅延なく行った。

[次年度への課題]

次年度も情報漏えいなどに注意し、入国管理局や渋谷区などへの報告も遅延なく行う。

<項目「9-4～9-5」>

[本年度の課題]

- ・毎年、作成されていた「年度末全体反省報告会」を包括的にまとめたものを平成29年から「自己点検・自己評価」としてホームページを通じて公表していく。公表は、5月までに完了したい。
- ・定期的開催されている教員グループミーティング及び学科会議、職員ミーティングを引き続き有益なものにし、課題達成に努める。

[取組の結果と点検・評価]

- ・2017年5月に「平成28年度 自己点検・自己評価報告書」をホームページにて公開することができた。当校の教育を広く知っていただくことが可能となり、年度末の全体反省報告会と共に次年度の教育活動の充実に繋げていける内容であった。
- ・教員グループミーティング、学科会議、各委員会について、定期的開催することができ、年度末全体反省会にて報告を行った。

- ・2018年1月、日本語教育振興協会に教育活動評価の申請を行った。書類審査と実地調査を経て、日本語教育機関教育活動評価基準に適合すると認定された（第18-G001号）。

[次年度への課題]

- ・「自己点検・自己評価報告」については、引き続きホームページで公開していく。
- ・日本語教育振興協会からの教育活動評価の結果について、評価委員からの報告を参考にして必要な個所の改善に努めていく。

10	社会貢献	評価
45	10-1 学校の教育資源や施設を活用した社会貢献を行っているか	5
46	10-2 学生のボランティア活動を奨励・支援しているか	4

《現状・具体的な取り組み／課題》

#### <項目「10-1」>

[本年度の課題]

海外子女教育振興財団へ教室を貸出し、外国語保持教室を行う。

渋谷区やボランティア団体と共催し、渋谷区在住外国人との国際交流事業を行う。

[取組の結果と点検・評価]

外国語保持教室は年に40日ほど土曜日曜に教室を使用し開催した。帰国子女の英語力保持に貢献した。

渋谷区国際交流事業は年4回、着物着付け教室などを行い、日本文化の紹介や外国人との交流を深めることができた。

[次年度への課題]

今後も外国語保持教室と渋谷区在住外国人との国際交流事業は続けていく。

#### <項目「10-2」>

[本年度の課題]

- ・警視庁や消防署の指導による防災講習などの実施の際には、積極的に参加できる体制を整える。

[取組の結果と点検・評価]

- ・今年は、官庁等の指導による講習会等の開催は学内では実施されなかったが、杉並国際学生会館では積極的に活動している様子がうかがえた。例えば、地域の防災訓練やお祭り参加、近隣の中学校での学生との交流会や講演会等である。地域の方との交流は、日本での安心、安全な生活の一助となり、世代を超えた人との交流は学生を成長させてくれる有益な体験となっている。

[次年度への課題]

- ・ボランティア活動ともいえる学生会館での地域との活動は、寮長に協力していただきながら継続していく。
- ・ボランティア活動については、依頼等があった場合は内容を精査し、可能な限り積極的な支援をしていく。

### 総括

本校では、各国から集まる留学生に日本語教育を行っているが、とりわけ国費留学生を預かる学校で

あるところから、国境を超えるコミュニケーション能力を身につけ、日本を好きになって卒業してもらうことが大きな使命であると考えている。

1980年に創立してから38年の間に、国費、私費合わせて8,202名の留学生在が学んできた。国と地域の数は、本年のキルギスを合わせ86に及ぶ。

本校が目指すのは「質の高い教育」である。それは学生自身のニーズであり、それを保証するのは質の高い教師の力である。このため教師40名のうち23名が専任である。その教師が担任制を敷き、事務局職員と協力して留学生にきめ細かい指導を行っている。教師は常に新しい試みを模索しており、本年もテキストの改訂や演劇訓練などを取り入れている。

日常的な生活支援のため学生寮を完備し、寮長・寮母が家族のように接している。

以上のように自己点検・自己評価は高いものがあると自負しているが、今後も学生の声を反映した取り組みを行っていくためにも、アンケートや卒業生の声の聞きとりなどを行っていく。